

伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

昭和三十年初頭の本町経済は、大分県との関係をぬきにしては語られないほど、その影響は強いものでした。細川藩の治世下、しかし経済に関しては、地理的な影響が大きいのと、大分商人の力量と、それらを支えた歴史的な好関係が、より大分よりになる、つい近い時代までその様でした。

本町で大分商人の影響を身近に受けた地域が、野尻鶴町でした。

今でこそ何件かの店が開いているものの、昭和四十年代までの商店街は、活気溢れる町並みでした。各商店がそれぞれに工夫され、品揃えも豊富だし、専門店が軒をつられていました。正月を迎える買出しが一番の賑わいであり、行列して買った荷物を運ぶための牛馬が、繋がれていました。周辺の人達にとってこの買出しは、「よそゆき」の感があり、少々の化粧をしましたし、それは一日かかりの年末行事でした。



▲野尻川上神社

野尻鶴町は野尻手永会所の所在地で、正徳六年（一七一六）に造成された新町です。

今でも鶴新町と呼ばれる方がいます。それまで野尻の中心地的な役割をしていた「川上」より広く、水の便もよいこの地域に居を構え南北交通の要として、発達してきました。

この町は、町家でありながらほとんどの家が馬家を持っており、昔から牛馬の飼養が盛んであり、獣医師も沢山ぞだちました。

そして鶴新町には、医師も代々おりました。安永四年（一七九二）に五人医師がいた記録が残っています。そして幕末嘉永七年長崎にて種痘を学び熊本に伝えた医師。最近の事で記憶に残っている方も多いと思われます、原田先生。沢山の医師がいました。

大勢いた子供達。多くの遊びの中で童歌も盛んに歌われました。男女入り混じった遊びから、男の子女の子と別々の遊び。この多種多様な遊びに、広き交流のあとを見出す事が出来ます。伝播によって伝えられた文化。それは大人たちより子供達の方がよりの確に物事を捉え、それを歌とか「しぐさ」にして伝えていったのでしょう。

そんな賑やかな軒を連ねる鶴町から、その裏手に水田が広がり、それを囲むかのように古い屋敷が見えてきます。そこを宮園といいます。春になると、家の前の水田にはレンゲの花が咲き、本当に沢山の歌をうたい無邪気に遊び

ました。

この地域何処の家からも見える、前面に広がる山々はすでに宮崎県になります。熊本・大分・宮崎の三境に広がり、文化的にも多様性に富んでいます。その中で子供のころ遊んだ遊び唄のなかに、この地域でしか聞けない唄があります。もう五十歳を過ぎた人達しか歌えなくなつたでしょう、童謡にも似た多くの唄。

時代背景を描写したものの。歌詞を書きとめると意味不明となるもの。それらは歌い継がれた長い歴史と、その発祥を大分県或いは宮崎県か、もっと遠い所で生まれ方言も入り混じり、そして伝わり、歌い継がれてきたあかしでありましょう。

鶴町あるいは津留町と標記するこの町。秋の大祭の頃出かけると、「おかりや」付近は車の通行もままならぬほどの賑わいでした。市が並び子供たちが鳴らす笛の音が祭りに来た事を知らせ、獅子舞そして招待された神楽が舞う。二日を有したお祭りでした。